

Raffiné Journal vol.08

表現に残るもの

言葉がなくても、
何かが伝わることがある。

声の高さ、
呼びかけるタイミング、
ふとした間。

それだけで、
その人の感覚が
静かにこちらへ届くことがある。

あるカメラマンさんと、撮影をご一緒した。

その方は
日本の方ではなかったのに、
言葉はほとんど通じなかった。

それでも、
やり取りに困ることはなかった。

声をかけるタイミング。
声のトーン。
そして、ほんの一瞬だけ遅れて届く呼びかけ。

そのどれもが、
こちらの感覚を崩さない位置に
静かに置かれていた。

撮影が始まる前、
私はすでにそのカメラマンさんの写真を見ていた。

人物の写真。
風景の写真。
物の写真。

被写体は違うのに、
どの写真にも
同じ温度が残っていた。

撮影が始まると、
理由が分かった。

その方は、
強く指示を出すことも、
場の空気を押すこともなかった。

ただ、
こちらの呼吸が整うのを
待つように立っていた。

そして、
ほんの少しの声で
次の瞬間を促す。

急がせる圧も、
作らせる力もない声だった。

撮影が終わったあと、
そのカメラマンさんの写真を
もう一度見返した。

人物の写真でも、
風景の写真でも、
物の写真でも、

そこには
同じ温度が残っている。

被写体の温度というより、
撮っている人の
感覚の温度だった。

会う前に見たときは、
その理由は分からなかった。

けれど、
実際に会ってみると、

声のトーンや
間の取り方、
立ち方や空気の触れ方が、

そのまま
写真の中に残っているように感じた。

そのまま
写真の中に残っているように感じた。

写真は、
目に見えるものだけを
写しているわけではないのかもしれない。

その人が
どんな感覚で世界を見ているのか。

それが
静かに残っているのだと思った。

表現は、作られるものではない。

声の置き方、間の取り方、
世界に触れるときの感覚。

それがそのまま、
残ってしまう。

Raffiné Journal vol.08
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné